

生涯學習情報誌

Life Learning

10 2020
Oct.
NO.362



アートを楽しむワークショップ 体験ミュージアム

本ワークショップは、3月にリアル開催される予定だったもの。コロナウイルスの影響で延期されていたが、内容をアレンジし、オンライン開催された。

①対話型鑑賞、②ブラインドスケッチの2つのワークショップが用意され、それぞれに30名前後が参加して始まった。

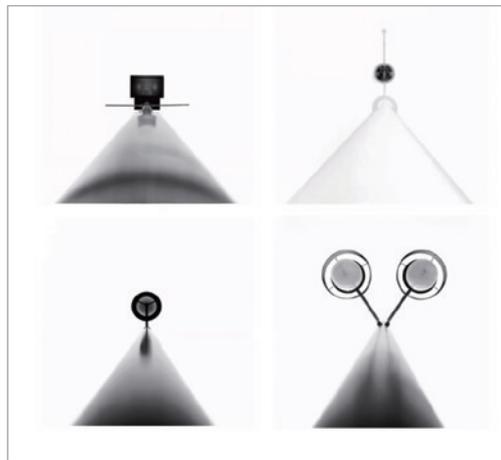
③では現代アーティストであるゲストの北桂樹氏による作品解説を踏まえ、一見かりづらいつられる現代アートをどう楽しみ、他者どう対話・議論していくかを体験した。必ずしも作家の意図に寄り添う必要はなく、むしろ鑑賞者の解釈や意見が加わって、対話や議論が生まれることに意味があるのだという。

④は、自分が見たアートを他者にどう伝えるかというトライ。伝え方を試行錯誤することで、作品をどう鑑賞するかという、多角的に作品を捉える機会にもなった。アートを楽しむ新たなきっかけになると同時に、どう見るか、どう伝えるか、どう聞き出すかという、コミュニケーションの訓練として、職場などでも用いるそうだ。

今回は、遠隔を感じない活発な対話が行われた反面、ワークショップ前後の交流などは起こりにくく、今後の課題か。

Workshop A

対話型鑑賞ワークショップ ～現代アートの視点の飛躍を知る～



①ゲストの北桂樹氏が2016年に発表した写真アートを解説。ランプシェード、妖精、道などに見えると参加者。実は、東日本大震災にて経験した“電気はなくなる”という気付きを残したく、街灯を下から撮ったもの。北氏は、作者の想いとは別に、鑑賞者の解釈や議論が加わって作品が完成する、長く議論されるのが良い作品と認識している。

②対話型鑑賞のウォーミングアップとして行われたのは、絵画アートを観て200字程度の手紙を書くというワーク。その作品を知らない人に、手紙を書いて、どんな作品か伝えるのだ。何がどう描かれているのかうまく伝えるだろうか？自分がどう感じたかも言いたいし。相手に伝えるという視点で言葉にするのは難しそうだが……。

③メインの現代アートを鑑賞しながら3～4人で対話をするワーク。作品は、床に置かれた銅製の立体物が3点。四角い容器のような工作物にも見えるし、一部は錆びていて、漂流物が廃材を拾い集めたようにも見える。実は作家が展示会場に送りつけたまま無造作に置かれた“作品”。配送という社会システムを経て完成したアートだった。

答えが一つではない現代アートを、対話をしながら、画面上にFACT(客観的事実)とTRUTH(主観的解釈)に分けて記録しながら共有していく。



■2020年9月5日
オンライン開催

ワークショップキュレーター

◎山原すずむ

グローバル&イノベーション
コンサルタント/早稲田大学
「リーダーシップ&コーチング」
講師/ワークショップデザイナー。
企業の新規事業の創出やグローバル展開の
支援をワークショップなど
を通して行う

◎柴前田勝太郎

株式会社ゆめみ/デザイン
ストラテジスト/ワークショップ
デザイナー/スクラムマ
スター/2030SDGs認定
ファシリテーター/企業の
新規事業開発や業務改善、
プロジェクトやチームの改善・
促進などに伴走する

●共催

青山学院大学 社会情報学部
青山学院大学 学習コミュニ
ティデザイン研究所

●協力

青山学院大学 社会情報学部
ワークショップデザイナー育成
プログラム事務局

Workshop B

ブラインドスケッチワークショップ

2人ずつブレイクアウトルームに分かれて行うワーク。
①ウォーミングアップとアイスブレイクを兼ね、自分の身の回りの「気にしているもの」を言葉で相手に伝えた。



②ブラインドスケッチは、伝え手だけにアートを見せて、伝えては言葉によって聞き手にどんな作品か説明する。聞き手は適宜質問をしながら、想像で作品を描いていく。

②素材はムンクの木版画。対話の場づくりとして、非日常的な素材である現代アートは適している。



聞き手が描いた絵を伝え手に公開。この伝え手は波打ち際の形を街のシルエットと解釈して伝えたようだ。



③立場を入れ替えての2作品目は、コツが分かってきたのか細部まで近い絵が描かれていた。自分の心象を伝えようとする人、色や構図を正確に伝えようとする人、お互いの関係性をまず作ろうとする人など、さまざまだった。

日本でも太鼓の歴史は古く、縄文期の遺跡からその原型と思われるものが出土している。楽器としての太鼓は、古墳時代に大陸から伝わったとされるが、非日常的な大音量は、狩りや戦の合図、宗教行事、祭礼などに広く用いられた。やがて歌舞伎など芸能の発達に伴い、楽器としても一般に広まっていった。

和太鼓の中で最も目にするのは、木をくり抜いた胴の両側に牛革を張り、多数の釘で止めた長胴太鼓（宮太鼓）。全国の和太鼓保存会やサークルは約1万5000もあり、広く老若男女に愛好されている。地域イベントなどで演奏する機会も多くポピュラーだ。

能や歌舞伎で活躍するのが高音の締太鼓。一般的に打楽器は拍子を刻むのが役割だが、締太鼓は効果音として風や雪のシーンなどの表現もする。能では3大楽器（小鼓、大鼓、締太鼓）がそれぞれの掛け声を交差しながら、音楽的な表現をする独特な世界だ。

近年、太鼓アンサンブルや和楽器の現代的演奏で多く使われるのが、写真のような桶胴太鼓。比較的軽く、踊りながら演奏することも多い。

1970年代から、佐渡の鬼太鼓座や分派した鼓童などが、和太鼓をメインとしたステージを海外で行い、逆輸入の形で日本でも見直され、人気が高まった。

和太鼓

Wadaiko



ようこそ！
和楽器の
世界へ+



♪音を聴いてみよう！

生涯学習開発財団のWEBサイトで、和太鼓の音色が聴けます。

<http://www.gllc.or.jp/>

または、左のQRコードからどうぞ。



AUN Jのステージなど現代的演奏では、数種類の太鼓を組み合わせ、ドラムのように用いることもある。

奏者に聴いたその魅力

井上良平
Inoue Ryohei



井上兄弟の双子の兄。鬼太鼓座を経て、2000年、弟とともにAUNを結成。2006年、日本文化継承を伝える活動をニューヨークに広げ、マンハッタンでのライブ活動や、全米各地のフェスティバルへ参加。同年、外務省に招聘され、南米ガテマラ、コスタリカ、コロンビア・ツアーも展開。2010年から「桜プロジェクト」として全国100校以上の小学校を訪問し、和楽器の演奏と桜の植樹を行っている。

私が高校3年のとき、音楽監督だった兄に誘われ雑用係として参加したのが鬼太鼓座です。ツア―直前にメンバーの欠員が出て、私と公平も1か月の猛練習をしてアメリカツアーに参加することになりました。そこで見たのは、カーネギーホールでロックコンサートのように観客を熱狂させる和太鼓の力でした。音楽に国境はないのです。

一方で、日本人ならではの感じ方もあります。私の母はピアノの先生で、家にはクラシックが流れていませんでした。中学生になってからは口ツクばかり聴いていました。それでも、初めて和楽器演奏に触れたときに衝撃を受けました。ロックはやめて、雅楽をはじめ日本の音楽のテープをごっそり買い込んで、ひたすら聴きました。

和太鼓は、田畑を守る虫追い太鼓、雨乞い太鼓、秋の収穫を祝う太鼓など、命に直結した音でした。歓喜に満ちたりズムや、ときには悲しみの響きだったかもしれません。戦の陣太鼓だったこともありません。やがて芸能や祭囃子の楽器として発達し、長い時間を経て現代に伝わりました。初めて聞いてもどこか懐かしさを感じる。それが日本人にとっての和楽器の音色、魅力ではないでしょうか。

●和楽器演奏で伝えたいこと

AUN Jで「One Asia」と題した、カンボジア、ミャンマー、ラオス、シンガポール、そして東京オペラシティホールと、5年間にわたったアジアツアーで、アジア各地の30数名の民族楽器演奏者とコラボをし、「One Asia」というテーマを1か国ずつ丁寧に話をしながら、ぼくらの想いを伝えました。音楽を通して、各国が良い関係を築き、それが音楽に現れる奇跡を感じ取ることができました。

音楽に国境はない、けれどその音色に国籍はある。和楽器で世界の人を虜にしながら、日本人が自分の根に思いを馳せる機会も、提供し続けます。連載ご愛読ありがとうございます！

●監修者：AUNプロフィール

井上公平・井上良平。1969年大阪にて5人兄弟の末の双子として生まれる。1988年、和太鼓集団・鬼太鼓座(おんどごぞ)に出会い、高校卒業と同時に入座。2000年に「AUN」として独立。2009年、邦楽界で活躍する若手を集めて「AUN-J クラシック・オーケストラ」を結成。公演回数は国内外で1400回以上。子どもたちに日本文化の魅力を伝えるため、全国の小学校を訪問し、和楽器演奏と桜を植える活動もしている。



●AUN 公演情報

和楽器の魅力探訪(シリーズ)

日時：2021年1月8日(金) 開場14時30分/開演15時
会場：川口リリア 音楽ホール(川口市川口3-1-1)
チケット：全席指定3,000円(税込) TEL購入048-254-9900(10:00~19:00)
※コロナウイルスの感染状況により予定が変更になる場合があります。

詳細：http://www.aunj.jp/jpn/livedisc/liveinfo/schedule.html